YAMAGA

近代の山鹿の偉人たちシリーズ 014

熊本県の近代蚕糸業の開祖（一八二三～一八九七）

長野濬平（ながのしゅんぺい）

横井小楠の塾で学んだ濬平は、二十四歳のときに、玉名郡南関に招かれて塾を開く。養蚕の研究に力を入れ、「養蚕富国論」を提唱。四十代後半から全国の養蚕先進地を視察。熊本藩に桑を植えることや養蚕試験所設立を提言。養蚕の普及と製糸の機械化により、殖産興業（しょくさんこうぎょう）と輸出貿易の振興を目指した。

濬平は、過酷な試練に何度も見舞われるが不屈の精神で乗り越え、明治二十六年に設立した熊本製糸合資会社では、努力の結果、遂に日本一の製品と評価され、海外に輸出されるようになった。

明治二十九年には、長年にわたる養蚕・製糸業の発展に尽くした功績が認められ、熊本県で初めて緑綬（りょくじゅ）褒章（ほうしょう）を受章した。

鹿本町の庄に生まれる

濬平は文政六年（一八二三）十月二十四日、山鹿郡稲田郷庄村（現在の山鹿市鹿本町庄）の儒医（学者であり医者でもある人）の家に生まれました。

濬平の生まれた家はもと源氏の出といわれ、時代を経て、山鹿郡長野村（現在の菊鹿町）に住み、長野氏と称して今日に姓を伝えられています。肥後勤皇党の始祖富田大鳳も長野家から出ています。

「学問の系譜」といわれる長野家に生まれた濬平は、はじめ父親について句読（漢文の読み方）を習い、一時、時習館教授近藤淡泉の塾に学びましたが、天保十四年（一八四三）横井小楠（熊本藩士、政治思想家）の私塾に入門しました。

横井小楠は、政治活動のかたわら、みずから茶園をつくり、櫨の品種改良に努め、川土手などには桑を植えさせ養蚕を奨励していました。このような小楠塾で濬平は、実学（実際の役に立つ学問）を学びました。

長野濬平と妻（寿喜）

生誕地（推定）

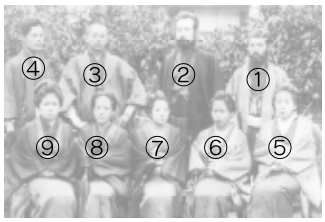
養蚕をおこそう

弘化四年（一八四七）、玉名郡南関の総庄屋木下初太郎の招きにより、濬平は南関に私塾を開きました。農村の子弟教育にあたると同時に、小楠塾で学んだ実学にもとづき、塾舎の周囲に桑を植え、みずから蚕を飼い、村人に養蚕をすすめました。また、『養蚕富国論』をあらわし、養蚕の必要性を広く世間にうったえました。

熊本では、江戸時代中期に、名君といわれた細川重賢により養蚕が奨励されたことがありました。また、この地方には「蚕の神様」といわれた島巳兮（鹿央町下米野）が、藩の命をうけて肥後の養蚕の普及に努めたことがありましたが、その後は次第に衰退していました。そのような状態にあったので、濬平は養蚕富国の考えを発表したのです。

明治二年（一八六九）濬平は、南関の私塾を閉じ、養蚕技術習得のため、先進地視察の旅にでかけました。この年濬平四十六歳でした。

養蚕先進地である甲州・武州・上州・信州地方（山梨、埼玉、群馬、長野県）の視察はこの年、春秋二回にわたって行われました。濬平は蚕室などの建築構造、蚕具（養蚕で用いる道具類）の良否、養蚕法、桑園の地質等詳細に調査し、養蚕富国の考えが正



濬平の子供たち

①(三男)長野関吉
②(長男)長野大造
③(四男)長野忠次
④(孫・親蔵の長男)長野親太郎
⑤(関吉妻)長野志賀
⑥(三女)田浦外年
⑦(二女)皆吉代寿
⑧(長女・親蔵妻)長野千寿
⑨(親太郎妻)長野津智

しいことを確信しました。

明治三年（一八七〇）の春には藩の養蚕伝習掛として三度目の視察にでかけました。このときは養子の親蔵（長女千寿の夫）も同伴しています。

養子親蔵は、玉名郡南関村の生まれで、養父濬平を扶（たす）け、若き実業家として、才能を発揮しました。

この頃、熊本でも藩政改革が始まっていました。藩知事に細川護久が任命され、横井小楠の塾を出た人たちが新藩庁に登用され、殖産興業（しょくさんこうぎょう）などの新しい政策を実施したのです。

三回にわたる先進地視察から得た、濬平の意見は次のとおりです。

一、荒地を開いて桑を植えること
一、希望者を募り先進地に派遣すること
一、各地に養蚕伝習所を建てて、先進地で学んできたものに指導させること

濬平の意見は、藩庁によってただちに実施されました。

明治四年（一八七一）、廃藩置県が行われました。県では養蚕伝習生を募集し、濬平を責任者として上州・信州・岩代（群馬・長野・福島県）等に派遣し、各地の養蚕の実状を視察させました。視察が終わると濬平は伝習生を集め、伝習の成果にもとずき熊本に適する養蚕法を研究しました。特に養蚕を発展させるには良い品種の桑を普及させる必要性があることが認められました。

ちょっとコラム①

●横井　小楠（よこい　しょうなん）

（1809年生れ～1869年没）幕末の傑出した肥後（熊本）の政治思想家。家塾「小楠堂」や「四時軒」で実学を指導し、長野濬平など多くの優れた人材を育てました。早くから現実的開国論を説き、近代日本の歩むべき道を構想し、坂本龍馬や吉田松陰、勝海舟などにも多大な影響を与えました。明治新政府の参与（国務大臣）に登用されましたが攘夷派の手によって暗殺されました。

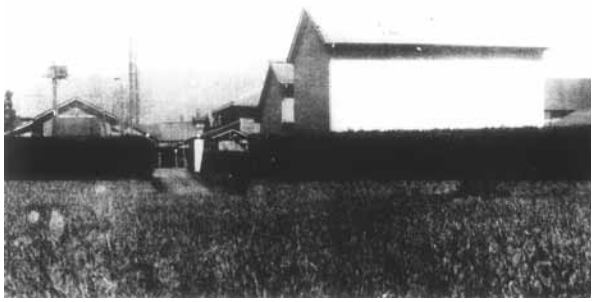
●島　已兮（しま　いけい）

本名は志賀親民半右衛門といい、隠居して島已兮と改名。

「蚕の神様」といわれ、肥後（熊本）の養蚕業の普及発展に貢献しました。玉名郡中富手永(現、山鹿市鹿央町）に住み、養蚕ならびに織絹方主任を仰せ付けられ、広く肥後（熊本）の各地を巡回し、指導にあたりました。その功績が認められ、藩から度々褒章を受けています。寛政8年(1769)12月2日、75歳で亡くなりました。

●廃藩　置県（はいはん　ちけん）

明治4年（1871）7月に行われた地方制度改革。全国にあった藩を廃止して府と県を置き、中央集権化が完全に達成されました。同年末には北海道のほか3つの府（東京府、大阪府、京都府）と72の県が置かれました。



来民製糸場

養蚕試験所の設立

明治五年（一八七二）一月には、養蚕試験所の設立に取りかかりました。敷地や桑園の地質等を考慮して次の十カ所を選定しました。

託磨郡九品寺村（熊本市九品寺）
託磨郡田迎村（熊本市田迎町）
上益城郡田口村（甲佐町）
玉名郡繁根木村（玉名市）
阿蘇郡小国村（小国町）
阿蘇郡内牧村（阿蘇市）
八代郡野津村（氷川町）
八代郡大村（八代市）
大分県鶴崎町（大分市）
山鹿郡来民町（山鹿市鹿本町）

濬平を責任者とする九品寺試験所は、本部の役割をにない、全体を統括するとともに県下の養蚕希望者の指導にあたりました。

これらの試験所は、当初県営でしたが、明治九年民間の経営に移されました。

ちょっとコラム②

●速水　堅曹（はやみ　けんそう）

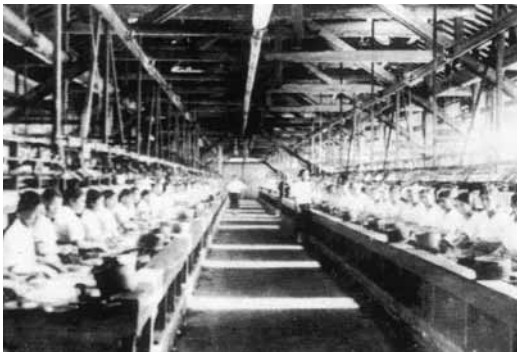
（1839年生れ～1913年没）武州川越（現、埼玉県川越市）に生れ、後に前橋藩士となりました。明治3年、日本で最初の器械製糸所である藩営前橋製糸所を開設。外国人技師から技術を習得し、日本最高の製糸技術者の地位を築きました。官営富岡製糸所の所長や日本初の全国的な生糸輸出専門商社の横浜同伸会社の社長などを歴任。全国各地の製糸所の技術指導を活発に行い、製糸技術の改良・普及、生糸の品質向上、人材育成に尽力し、日本が世界最大の生糸輸出国となるのに多大な功績をあげました。

器械製糸を始める

養蚕がさかんになり、繭が生産されるようになると製糸（繭から糸をつくる）をしなければなりません。長野、群馬等の先進地では座繰製糸の方法で生産されていました。座繰製糸は手まわしにより歯車を動かし、煮繭鍋からとった繭の糸を糸枠に巻きつけ生糸をとる方法です。これはすでに江戸時代のおわり頃から用いられ、しだいに改良されてきていました。それだけではなく、群馬県の富岡製糸場では革新的な器械製糸も導入されていました。濬平は、かつて先進地で器械製糸を目の当たりにして、その性能に目をみはったものでした。熊本にも器械製糸を始めることが濬平の新しい課題になりました。

そのために濬平は、養子親蔵夫妻を器械製糸の先駆者といわれた群馬の速水堅曹のもとに派遣し、器械製糸の技術習得にあたらせました。そして県庁の資金で改良された座繰製糸器械三座を購入し、九品寺試験所に備え、製糸を始めました。明治五年のころ器械製糸は西日本では最初のことでした。

明治六年（一八七三）速水堅曹の紹介で群馬の大野ナミという女性がまねかれました。九品寺の試験所をはじめ、県内各地で器械製糸、座繰製糸の技術を指導してもらいました。それにより養蚕製糸業の拡張がはかられ、この年蚕卵紙および生糸を横浜に送り海外輸出を試みるまでになりました。


来民製糸場 操糸工場

明治二年養蚕をおこそうと決意して以来数年にして製糸器械を導入することが出来たのは、県の政策と、経営面における濬平、親蔵親子、技術面における先進地の指導援助など、多くの人達の努力によるものです。

製糸工場の設立

明治七年（一八七四）には、製糸器械十六座、工女五十人に拡大し、生糸五十貫（一八七キロ）を輸出するようになりました。

順調に発展してきた濬平の事業にも、二つの難問題が発生しました。一つは、その年の秋におそった台風の被害です。試験所の家屋が倒れ、器械が破損、桑園が荒れてしまいました。しかし濬平は、ただちに家屋の修理と桑園の復旧にとりかかり、復興することができました。ところが運営資金の問題がおきました。

県から貸与された資金について敷地設備一切の資金償還の命令をうけたのです。濬平は台風による災害の上に資金返納という難問に直面しました。しかし資金返納について計画を立てなおすようにとの国の指示があり、償還期間の延長ということで、当面の難関をのりきることができました。

明治八年（一八七五）嘉悦氏房らとはかり、上益城郡豊内村（甲佐町）に緑川製糸場を設立しました。社長嘉悦氏房をたすけ、業務を担当したのは濬平の養子親蔵でした。

緑川製糸場は工場制器械製糸であったので原料の繭は良質のものが必要でした。このころから養蚕と製糸は分かれて、原料繭の生産を濬平が担当し、製糸の業務は養子の親蔵が担当しました。

惜しまれる親蔵の客死

明治九年（一八七六）春、敦賀（つるが）県（福井県）の依頼により親蔵は同県勝山に出来る製糸場を指導するため、一月下旬から同年四月末まで留まって製糸法を伝授してきました。

親蔵の蚕糸業界における位置、手腕が次第に認められ、明治十二年（一八七九）二月には全国の模範製糸場であった群馬県富岡製糸場の副所長に抜擢（ばってき）され、次いで同所長心得（こころえ）になりました。富岡製糸場における親蔵の働きはめざましく、このため、かえって周囲からねたまれるようになりました。

明治十二年（一八七九）九月十九日朝、親蔵は同所官舎において不慮（ふりょ）の災難に遭（あ）い亡くなりました。享年（きょうねん）二十九歳。人々は驚き悲しみ、蚕糸業界にとってそれは大きな損失でした。訃報（ふほう）に接した濬平と千寿夫人の嘆きはひとしお深いものがありました。

明治十六年（一八八三）十一月、九州沖縄八県連合共進会において追賞を授与されました。

追賞授与証

熊本県肥後国託摩郡九品寺
長野濬平養子
長野　親蔵

夙（つと）ニ養蚕製糸ニ従事シ養父長野濬平ノ志ヲ賛（たす）ケ明治三年以後辛苦経営シテ大（おおい）ニ公衆ヲ裨益（ひえき）シ此業漸ク該地方ニ奮与（ふんよ）スル八偏（ひとえ）ニ親蔵の計画ニヨルモノト云ウベシ依テ追賞ス

明治十六年十一月二十三日

農商務卿　正四位勲一等　西郷　従道

苦難をのりこえて

養蚕振興の必要性をますます感じた濬平は、秋蚕（あきこ）を奨励（それまで春蚕しか飼っていなかった）し、さらに明治十二年（一八七九）先進地へでかけ、天然飼育を改良するため火力飼育法を研究しました。火力飼育法では炭火等で華氏七十五度（摂氏二十四度）に

室温を保つことで蚕の発育を促し、飼育日数を短縮することができるようになりました。濬平は『蚕業草案』をあらわし、天然飼育にかわる火力飼育法の普及をはかりました。

養蚕に明るい光が見えてきた、明治十五年（一八八二）また難問題が出てきました。一つは濬平の本拠地九品寺の養蚕所が火災にあい、家屋、養蚕室等すべてを失いました。濬平は悲運にもめげず、蚕室を復旧しました。第二には緑川製糸場の閉鎖です。養子親蔵の努力にもかかわらず、悪条件が重なり、緑川製糸場は、ついに閉鎖されたのです。県内の他の三か所の器械製糸場もこのころ事業不振におちいっていました。

そこで濬平は有志とはかり、明治十六年（一八八三）勧業資本金を借り受け、熊本製糸会社を熊本市北千反畑に設立しました。かねて養蚕者と製糸業者は、繭の価格で対立していましたので、これを解消するため両者の蚕業組合をつくり、繭の適正価格維持確保をはかり輸出生糸の生産にあたりました。しかし濬平が経営する九品寺養蚕所では桑の萎縮病が発生し、その原因がわかりませんでした。

県庁にその対策を願いましたが、養蚕業の遅れ、繭不足はどうすることもできず、熊本製糸会社は明治二十二年（一八八九）に閉鎖してしまいました。

器械製糸が事業不振におちいっていたころ、養蚕は発展のきざしをみせはじめました。それまで養蚕は帰農士族や豪農を中心としておこなわれていましたが、一般農家へも普及してきたのです。濬平がかねて目指していた養蚕飼育の家庭化がすすんできたのです。農家の副業として養蚕の有利さが認識されるようになったのです。

養蚕のこうした発展を背景に、濬平は明治二十六年（一八九三）九品寺の養蚕所に資本金千五百円、器械六十釜をもって熊本製糸合資会社を創立しました。設立当初、その製品は信州（長野県）のものに比べて品質が劣っていましたが、次第に改良され、明治二十八年（一八九五）には同格に評価されるようになりました。そして明治三十六年（一九〇三）ころからは全国最優秀品となり、横浜市場では信州生糸より高値で引きとられ海外に輸出されるようになりました。

また、濬平は良い蚕の品種を育てるため蚕種製造にも力をいれました。この蚕種部はのち長野製種組として経営されました。養蚕・製糸が共に進展するようになり、濬平の三十年におよぶ努力がやっと実を結びはじめたのです。

むすび

明治二十九年（一八九六）濬平の功績が認められ、この年の春、緑綬褒章を受けました。

「夙ニ九州地方蚕業ノ振ハサルヲ慨シ、明治初関東諸国ヲ歴遊シテ、蚕糸ノ特質ヲ視察シ、帰リテ熊本藩ニ建議シ、命ヲ承ケテ養蚕試験場十ヶ所ヲ設ケ、桑田ヲ開闢（ひらく）シ、桑苗ヲ移植シ、生徒ヲ各地ニ派シテ其ノ業ヲ練習セシム、経営誘掖（人をみちびくこと）甚努ム、尋テ器械製糸場ヲ創立シ、或ハ秋蚕社ヲ興シ、火力育法ヲ講究シ、屢々災厄ニ遭フテ屈撓（たわむ）セス、刻苦瘁励茲ニ二十有七年、其ノ業ヲ伝フルモノ前後四百余名、近県ニ散在シ斯業ヲ剏始（創始）スルモノ勘ナカラサル等、洵ニ実業ニ精励シ、衆民ノ模範トス　仍テ明治一四年一二月七日勅定ノ緑綬褒章ヲ賜ヒ、其善行ヲ表彰ス」

右の受賞のとき、濬平七十三歳の春でした。緑綬褒章は実業に精励して一般の模範となる者に与えられるものです。受賞後濬平は、明治三十年（一八九七）十一月二十一日、七十四歳の生涯をとじました。濬平は桑陰と号し、熊本県の近代蚕糸業の開祖としてその一生は桑とともにあったのです。

蚕を飼う

昭和の中ごろまでは養蚕農家の数は多く、どこの村へ行っても蚕を飼っている農家が見られたものです。

農家の人たちが蚕を飼うのは、蚕に繭をつくらせてそれを売るためです。農家でつくられた繭は、乾燥場へ運ばれ、熱によって乾燥させます。これを乾繭（かんけん）といいますが、蛹（さなぎ）を殺して水分を発散させ、長期の保存に耐えるようにします。製糸工場ではこの乾繭をつかって生糸をつくります。生糸は織物業者の手によって絹織物となります。絹織物は、染色、加工されて絹製品となるのです。

絹の原料となる繭をつくる蚕とは、どんな昆虫でしょうか。分類学では、節足動物門、昆虫網、鱗翅目、カイコガ科、カイコ属に所属し、学名をボンビックス・モリという、完全変態する昆虫です。蚕の一生には、卵、幼虫、蛹、成虫の四つの段階があり、この全部を経て蚕の一世代が完了します。

蚕の卵は植物の種子に似ているので、蚕種とか種ともよばれています。卵はふつう厚紙（蚕卵台紙（さんらんだいし））といいます）の上に産みつけられています。この卵はねずみ色とか濃い藤色をしていますが、幼虫が生まれる（孵化（ふか））といいます）三日ほど前になると、青味を帯びてきます。蚕の卵をかえすことを、催青（さいせい）といいますが、ふつう温度は摂氏二十五度で約十一日かかります。

青味がかった卵は、だんだん青黒くなり、孵化するとき幼虫は卵の殻の一部を食い破って出てきます。孵化は二～三日にわたることがありますが、幼虫が孵化するのは朝です。孵化した幼虫は体長が三ミリ程度で、体に毛が生えていて、黒くてアリのようにみえるので、孵化幼虫のことを毛蚕（けご）とか蟻蚕（ぎさん）とよんでいます。毛蚕に桑を与えて、幼虫の飼育が始まるのですが、これを「掃き立（たて）」とよんでいます。毛蚕は二～三日すると毛が落ちたようにみえ、また体全体が黄味を帯びてきます。これを「毛振（けぶる）い」といいます。さらに一日ほどたつと、桑を食べずに、頭を持ち上げたまま静止する時期があります。眠っているように見えますので、これを「眠（みん）」といいますが、この間に外皮の内側に新しい外皮ができるのです。

しばらくすると、頭の方から古い外皮をぬぎすて、新しい外皮をもった幼虫になります。このことを「脱皮（だっぴ）」といいます。

脱皮をすませることを「起きる」といい、起きた蚕を起蚕（きさん）とよびます。蚕はこのような眠と脱皮を四回くりかえします。第一回の眠（一眠）までを一令、脱皮して第二回の眠（二眠）までを二令とよび、以下五令まで続くわけです。また、一令から三令までの蚕を「稚蚕」、四令から五令までの蚕を「壮蚕」と呼びます。

桑の葉をどの程度与えたらよいかということは熟練を要します。蚕が大きくなったときは、一日に二、三回与えますが、一度与えた桑の葉がほぼ食べつくされているときに次の葉を与えていくとよいでしょう。

給桑（蚕に桑をあたえる）（菊鹿町）

屋外飼育　（菊鹿町）

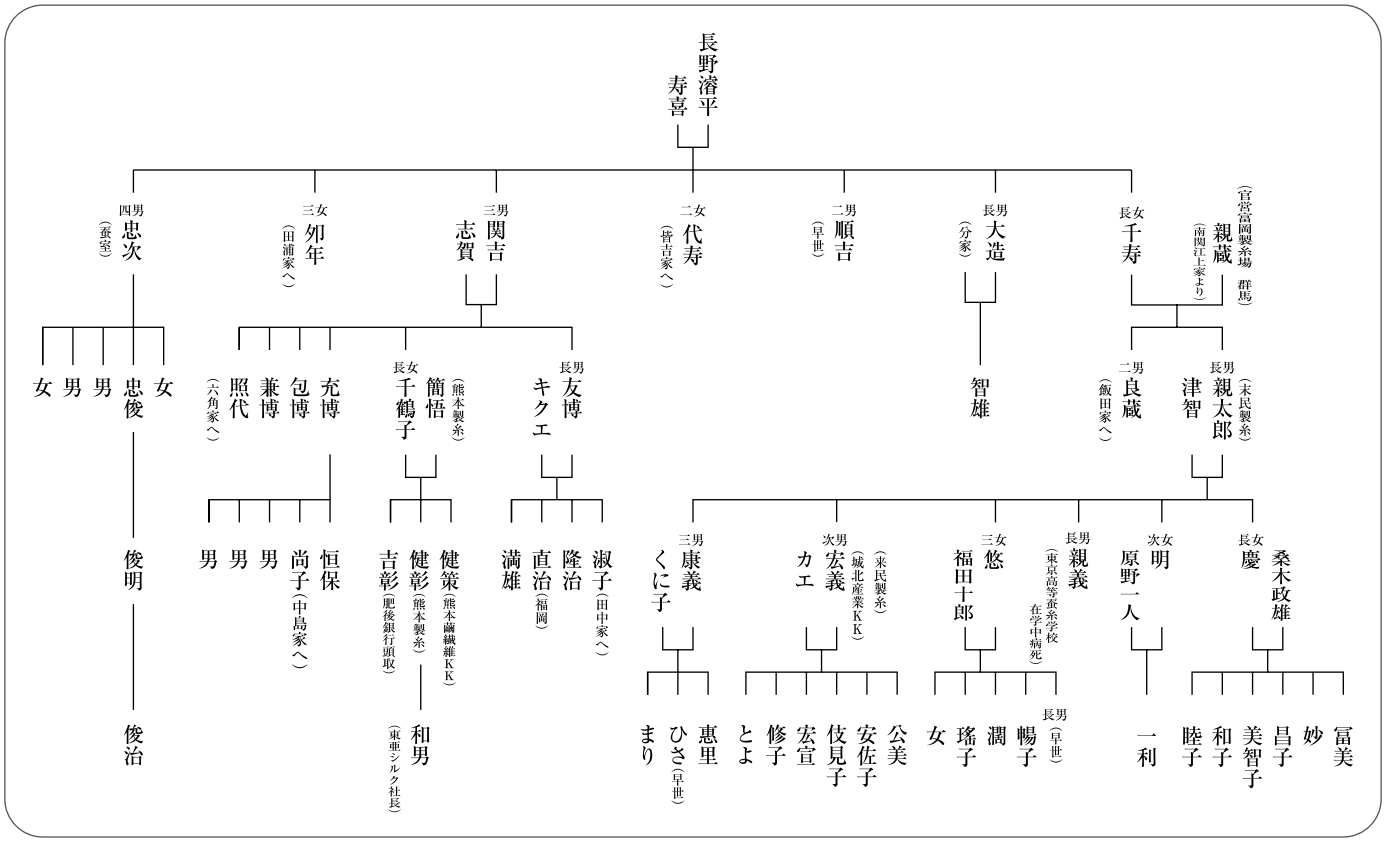
熊本県の近代蚕糸業の開祖

長野 濬平

SHUNPEI NAGANO 1823～1897

年表 History

- 文政六年（一八二三）▼山鹿郡庄村の儒医長野集（成卿）の長男として生まれる
- 天保十四年（一八四三）▼横井小楠の私塾に入門、実学を学ぶ
- 弘化四年（一八四七）▼玉名郡南関の総庄屋木下初太郎の招きにより、南関に私塾を開く。『養蚕富国論』を著わす
- 明治二年（一八六九）▼南関の私塾を閉じ、養蚕技術取得のため、先進地視察へでかける（春秋二回）
- 明治三年（一八七〇）▼藩の養蚕伝習掛として三度目の先進地視察にでかける。養子親蔵を同伴
  先進地視察から得た意見を藩庁へ具申（意見をのべる）
- 明治四年（一八七一）▼県が募集した養蚕伝習生を引率して上州・信州・岩代（群馬・長野・福島県）各地の養蚕の実情を視察させる
- 明治五年（一八七二）▼養蚕試験所の設立（十カ所）
  養子親蔵夫妻を群馬の速水堅曹のもとに派遣、器械製糸の技術習得にあたらせる
- 明治八年（一八七五）▼九品寺試験所にはじめて製糸機械を設置
  上益城郡豊内村（甲佐町）に緑川製糸場設立、養子親蔵が業務担当
- 明治十一年（一八七八）▼秋蚕の孵化に成功
- 明治十二年（一八七九）▼養子親蔵　官営富岡製糸場の副所長（同所長心得）に抜擢される
  養子親蔵　富岡製糸場官舎において不慮の災難に遭い同年九月十九日亡くなる（享年二十九歳）
  先進地へでかけ火力飼育法を研究し、『蚕業草案』を著わす
- 明治十六年（一八八三）▼熊本市北千反畑に熊本製糸会社設立
- 明治二十六年（一八九三）▼九品寺の養蚕所に熊本製糸合資会社設立
- 明治二十九年（一八九六）▼緑綬褒賞を受ける（濬平七十三歳）
- 明治三十年（一八九七）▼七十四歳で永眠
- 平成二十一年（二〇〇九）▼熊本市九品寺から濬平・寿喜夫妻の墓を山鹿市菊鹿町の長野家墓地に移す。十一月に「長野濬平先生顕彰の集い」が設立される。



近代の山鹿の偉人たち　014
熊本県の蚕糸業の開祖　長野 濬平

平成 22 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会　教育部　文化課
〒861-0541　熊本県山鹿市鍋田 2085（博物館内）
TEL　0968 - 43 - 1691

編集委員
大墨通夫（山鹿市文化財協力員）
西村亮一（山鹿市文化財保護委員会副委員長）
芹川一誠（山鹿市文化財保護委員会委員）

参考文献・ご協力頂いた方（敬称略）

安武幸孝（鹿本町御宇田）所蔵、長野家関係文書

県立図書館　郷土資料室

『熊本県蚕業史』三分冊の三（大正五年）

『熊本の先覚者』（昭和四十三年）